

いのちを支えて

県内緩和ケアの現場から

□□1

日本人の三人に一人ががんで亡くなっている。その数、県内で年間七千人以上。病院でのがん告知や余命宣告は日常の風景となった。だが、患者と家族の痛み、悩み、苦しみは昔と変わらない。最期をみとる終末期医療、患者を癒やすホスピスといった「緩和ケア」の重要性が増している。最期まで自分らしく生きたいと願う患者、それを見守る家族の思いに医療はどこまで応えられるのか。いのちを支える緩和ケアの現場、ついでにすみか、を歩いた。

(学芸部・笹川比呂子、大木亮子)

「強い痛みが出たとき、お薬を飲みましたよね。効き目はどうでしたか?」。新潟市西区の新潟こぼり病院緩和ケア病棟。薬剤師の大岩美奈子さん(二四)が、ベッドに横たわる終末期のがん患者に声を掛けた。

八十代この男性が服用したのは「レスキユー」という即効性の医療用麻薬(オピオイド)。がんによる突発的な痛みを和らげる薬

医療用麻薬

根強い偏見 医師にも

薬剤師の助言浸透へ一役

同病棟では今春から、週一回の医師の回診に薬剤師が同行している。「多様な職種がかかわった方が(治療に必要な)情報量が多くなる」(水戸将郎内科部長)からだ。担当する大岩さんは「一人の訴えや表情から薬の効果を見極められなく、痛みだけを取り除く」ことができる。

世界保健機関(WHO)は一九八六年、痛み(O)は一九八六年、痛み(O)の段階ごとに、オピオイドを含む鎮痛薬の組み合わせを示した指針を出した。これに沿えば、大半の痛みが取れるという。

しかし、国内では十分にオピオイドが広

がんと関係する新薬(がんセンター新潟病院。医師ら十一人からなる緩和ケアチームの一員、薬剤師の川原史子さん(四〇)は「モルヒネや麻薬という言葉の響きだけで、ほぼ全員が動揺し、中には使用をかたくなに拒む患者もいる」と話している。



医師と共に回診する大岩薬剤師(中央)。患者の言葉や表情からオピオイドの効果を読み取る。新潟市西区の新潟こぼり病院

に反映されないこともある」ともどかしさを漏らす。

こうした状況について、長岡市の長岡西病院緩和ケア病棟(バー)の現場和子医師(四八)は「医師が適量を見極めて処方する限りは安全」と指摘。「体に痛みがあると、残された時間をどう生きるかを考える余力がなくなってしまう」とオピオイドの「食わず嫌い」をやめるべきだと訴える。

医療用麻薬(オピオイド)は神経や脳に直接作用し、がん特有の痛みを感じなくさせる。主成分はモルヒネ、量を減らす。

オキシコドン、フェンタニルの三種類で、注用量は欧米先進国に比べ、極めて少ない。世界保健機関

WHO推奨 欧米は多用

薬がある。通常の鎮痛(WHO)の推奨にもか

剤に比べ、さまざまに部位の痛みを一度に抑えらる。

オピオイドは痛みの緩和に使う限り中毒にはならない。ただ、鎮痛効果のある量を大きく

川原さんは二〇〇三年、右手の良性腫瘍の摘出後、痛み止めとして自らモルヒネ点滴をした。「痛みは軽くなり、副作用の吐き気もなかった」。ためらう患者には、この経験を語ることもある。

「オピオイドがく当たり前の選択肢になるためには、薬の専門家である薬剤師もキーマン」と川原さん。その自覚が、積極的に患者とかかわる日々を支えている。